

新田次郎全集

第十四卷

新田次郎全集 **14**

新潮社版

アラスカ物語

氷原

目次

アラスカ物語

*

氷原

非情のブリザード

北方領土

氷葬

真夜中の太陽

解題

5

243

263

275

325

351

382

ア
ラ
ス
カ
物
語
・
氷
原

ア
ラ
ス
カ
物
語

第一章 北極光

1

フランク安田は、それを見まいとした。眼を氷原の上に落してひたすら歩き続けようとした。だがそうすることはすこぶる危険なことであった。方向を失ったときは死であり、彼の死は同時にベアー号の死でもあった。

フランク安田は眼を上げて北極光を見た。

空で光彩の爆発が起っていた。赤と緑がからまり合つて渦を巻き、その中心から緑の矢があらゆる空間に向つて放射されていた。彼に向つて降りそそがれる無限に近いほど長い緑の矢は間断なく明滅をくりかえしていた。

光の矢は彼を射抜くことはない。それは頭上はるかに高いところで消えた。だが、消えた緑の矢は、感覚的には、姿を隠したままで、彼に向つて降りそそがれていた。身体

に痛みこそ感じないが、恐怖は彼の全身を貫き、しばしば立止らざるを得なかった。

空間で爆発する光彩のきらめきがあつても音はなかった。空間いっぱい埋めている、濃緑色の矢のうなり音も聞えなかった。すべてが静寂な暗闇の中で行われていた。

彼は北極光が想像もつかないほど高い空で起る神秘的自然現象であり極地でしか見られないものであることを既に知っていた。何等危害を加えるものでないことも知っていた。

それは夜空に咲く花でもないし、打ち揚げられた煙火のようなものでもなかった。それこそ暗い空間における色彩の舞踏であり、夜の天帝の權威を背景にした威嚇であった。虹とは全然異なったものだつた。虹には色の配列の順序が決められていた。色と色の境目には中間色があつた。

オーロラと虹との間には空間における色彩の表現の一つという以外には、ほとんど共通点はなかった。オーロラには虹のように、配列秩序に規則がなかった。色と色との境界をその両側の色の中間色に接続することもなく、不連続に赤から緑にまた突然黄色に転じていた。オーロラは原色に満ち満ちていた。原色以外の色もあつたが、その色はすべて個性的で、オーロラという場でしか見られないものであつた。

オーロラが出現すると、氷原が明るくなったように見える。確かにいかほどかは明るくなる。しかしそれはごく僅かな明るさであつて、月の出ほどに期待されるものではなかった。明るさはあつたが、少なくとも星の明るさよりも華麗な明るさというだけのことであり、北極海は、オーロラとかかわりのない黒い氷原として横たわつていた。

オーロラは静止している部分がなかった。あらゆる部分がせわしく動いていた。明滅を性急に続けながら揺れ動いていた。色彩の渦が空を回転しながら走ると、その後には赤い流れができ、それが河になり、帯となった瞬間、変転して緑の大蛇だいじやとなった。

フランク安田にはこの次になにが起るかが不安だつた。このような恐ろしい光景を何時間も見ていたら、気が狂つて終には死ぬだろうとさえ思つた。

眼を閉じよう。そして天の怒りがおさまるまで動くのを止めようと思つた。彼は背負つていた荷物をおろし、敷皮を氷原の上に延べ、毛布にくるまつた。

彼が色彩の狂乱に対して恭順を示したとき、北極光もまた彼に対して、いささか態度を変えたようであつた。明滅には変化がなかったが、色彩が穏やかになつた。原色の濃度がうすめられたがために、景觀が全体的に静かになつた。緑の蛇は延びるだけ延びた後でS字状に縮まり、胴のふく

らみが面に変り、そのまま氷原に向つて垂れた。たちまちそれは緑一色の厚手のカーテンになり、カーテンが揺れるたびに、その陰影のように新たに黄色の光彩が現われた。カーテンは揺れながらかなりの速度で空間を流れた。流れることによつて少しずつ色あせて行つた。

色彩で空間が埋め尽されたとき、オーロラは南に向つて流れ出し規模を収縮して行つた。どうやら、夜空の饗宴はその終りに近づいたようだった。緑と黄色の縞のカーテンは、やがて二色の斑点はんてんとなつて南の果てにしぼんで行き、やがて消えた。後には星が輝いていた。

フランク安田はオーロラの消えた方向に正対してしばらく考えていたが、そのままそこに蹲つて懐中から磁石を出し、マッチを擦つた。米国沿岸警備船ベアー号のハーレイ船長との別れのひとまが思い出された。

フランク、ここでは磁石はあまり当てにはならない。しかし、他に当てになるものがない時にはやはりこれを使わねばならない。おそらく君は極地における磁石の使い方を知っているだろうけれど、念のために話して置こう。磁石の示す北は地理上の北ではない。ほんとうの北は磁石の示す北より西に二十五度寄つたところにある。そのことをはつきり頭の中に入れて使わないと、とんでもないことになる。北極星は頭上にありすぎて、これも頼りにはならない。

月だが、極地の月はぜんぜん気まぐれだ。月齢によっても季節によっても、また年によってもその動きが違って来る。冬至のころ満月だったとしても、その月の南中時の高度は年によつて四十六度から三十六度まで変化するし、北に廻ったときの高度も十度から零度まで変化する。つまり月は当てにならないということだ。ただ、月も太陽と同じように、その高度が一番高くなるときは、一番南に近づいたということになる。その逆に一番低くなるときは北に近づいたことになる。このことを頭に入れて置けば、月もまんざら捨てたものではない。しかしなんと言つても、極地の暗夜の期間中に一番たよりになるのは、一日に一度やつて来る青い夜明けだ。その青い夜明けの方向が南だから、それを眼ざして行けばポイントバローへ行きつくことができる。いいかね、フランク、お前が行かねばならないポイントバローは南の方向にある。南に向つて一三〇マイルほど歩いたら、北極海の氷原とアラスカ大陸との境界線に出る。その海岸線を二〇マイルほど北東に向つて歩けばポイントバローだ。南の方向を間違えるなよ。一日に一度訪れる青い夜明けの見える方向が南だ。確実に南の方向をつかむには青い夜明けにたよるのが一番だ」

ハーレイ船長はその言葉を再度繰返して言つてから、
「君の成功を祈る」

と言つた。低い声だった。自信のない声だった。成功を祈ると言われているのにさよならと言われているように聞えた。ハーレイ船長の眼には同情だけがあつた。期待はなかつた。絶望に近い気持で、成功を祈ると言わねばならない、船長としての義務感だけが表面に浮いて見えた。フランクはいまオーロラが消えたばかりの空に眼を投げた。

「磁石によるとオーロラの消えたあたりが南になる。南へ南へと歩かないかぎり生きることとはできないのだ」

そう言いながら見上げると北極星が頭上にあつた。北極星と彼を結ぶ方向が北であることには間違ひはないが、北極星の反対方向に当る南は、彼が踏みしめている氷原の直下になる。北緯七十度以北になると、たとえ北極星が見えても、北極星を道案内として旅をするのは、測定器械なしではむずかしいことなのだ。

彼はオーロラの消えた方向に輝いている星を目標とした。星の名も知らないし星座も知らなかつた。しかし、彼が選んだその星はかなり明るい星であり、運がいいことには、南の地平線の近くに輝いていた。

その星を眼ざして歩けば、南に向つて歩いていることになる。星は時間と共に動く。しかし、その星の動き方には法則がある。その星は地平線に対して或る角度を持つて静

かに動いていた。動いた時点で、その星を、その傾斜角に沿って地平線に戻せば、そこに南を発見できるのだ。

彼は荷物をまとめた。そして、南に向ってゆっくりと歩き出した。時々磁石を出して南の方向をチェックした。

静かな夜であった。このような夜が続けば、ポイントバローに到着することは、そうむずかしいことではないと思われる。

ベアー号を離れてから既に五日経っていた。青い夜明けの空を目標にしてベアー号を後にしたが、青い空は三時間で暗い空になった。北極海にまがりなりにも、朝らしい明るさが見えるのはこの三時間だけであった。後の二十一時間は光はなかった。

出発して二日目に嵐あらしになった。吹雪は三日間続いた。動くことはできなかった。そして五日目に、彼はオーロラを見たのである。

ベアー号を出発したとき彼は頭の中で計算した。五日間で一三〇マイルは踏破し、そこらあたりにあるアラスカ大陸の北限の地を発見しようと思っていた。だが歩いたのは、最初の一日だけで、次の三日間は、吹雪の中で、エスキモー犬のように蹲すくって眠っているより仕方がなかった。だから彼は今、歩かねばならなかった。持っている食糧に限りがあった。ハーレイ船長が十日分の食糧を分けてくれた。

その食糧が尽きるまでに、ポイントバローを発見しなければ、彼は確実に死ぬことになる。そして、彼が死んで、氷に封じこめられたベアー号救援の手がさし延べられないということになると、おそらく、ベアー号では食糧を巡っての争いが起り、乗組員のうち何人かは死なねばならないような事態に立ち至るだろう。

米国沿岸警備船ベアー号は三本マストの大型機帆船（発動機付帆船）だった。真白く塗られた八百五十噸しんの警備船ベアー号は快速をもつて鳴らしていた。大砲も持っていた。戦うための大砲ではなく、密猟船に警告を与えるための大砲だった。

かつて、北極海は鯨の宝庫であり、海獣の狩場だったが、ロシアがアラスカを支配していたころ、ほとんど無制限に近い濫獲らんかくがなされたがためにこれらの動物たちは急激に減少した。ロシアはアラスカを見限ってアメリカに売った。

アメリカは、高価な冷蔵庫を買ったものと、諸外国から陰口を叩たたかねがらも、アラスカを買収すると、まず北極海の動物資源保護に乗り出した。原住民以外の者が海獣を獲ることを禁止した。エスキモーには古来からの特権を認めてやることによって、彼等の生きる道を開いてやったのである。

沿岸警備船ペアー号は北極海における密猟を監視するために派遣されていた。鯨は絶滅に瀕し、他の海獣もまた同じ運命にあった。海獣によつては保護区域を設けていたが、密猟船の中には悪名高い海狼号のようなものがあつて、鯨の密猟をするばかりではなく、北極海の沿岸のエスキモー部落に乗りこんで殆ど掠奪にひとしい方法で、彼等がためこんだ毛皮類をかつさらつて行つた。海賊船同様の船であつた。

ペアー号は海狼号をその年も追い廻してゐた。海狼号が法を犯した現場を見つけて、拿捕しようとした。だが海狼号は巧みにペアー号の裏をかくて、その年も北極海と北極海に面したアラスカ沿岸を荒し廻つてゐた。

如何なる船も九月の半ばを過ぎれば北極海におさらばすることを考えねばならなかつた。年によつては一カ月も早く、氷が張りつめることがあつた。

ペアー号が海狼号が現われたという情報を得たのは九月の末であつた。そろそろ引き揚げようとしていたところに入つて来た情報だつた。

ハーレイ船長は海狼号を追つた。今度こそ不法を行う現場を取りおさえ、武装を解除し、主なる船員を捕え、船を拿捕してやろうと考えた。だが、海狼号はどうとう捕えることはできなかった。そして、ペアー号はポイントバロー

北方一三〇マイルの海上で突然襲つて来た異常寒波による気温の急降に遭遇し、氷の中に封じこめられたのである。

フランク安田は、ペアー号を取り巻く蓮の葉状の水を見たとき美しいと思つた。氷の蓮は太陽の光を受けてきらきらと輝いた。だがその氷の蓮の葉は見えている間に面積を拡張、氷の蓮の葉と蓮の葉の間に隙間がなくなると、海は消え、そこに想像もしなかつた氷原が出現した。ペアー号は氷から脱出しようと努力した。しかし、脱出速度より、氷の生長速度の方が上まわつてゐた。ペアー号は一夜にして、北極海の捕虜になつた。

これで一冬、北極海の氷の上で寝て暮すことになつたのか。

と船員たちは口々に言つた。だが、彼等はそれで取り乱すようなことはなかつた。こういう場合を想定して、一冬過すだけの食糧は積みこんでいた。乗組員三十七名は、食糧のことよりも、退屈きわまる暗闇の冬をどうして過すかを心配してゐた。

十一月になると太陽は地平線の下に消え、やがて夜だけの世界がやつて来た。うさばらしを兼ねたパーティーが船内で行われた。船員は飲んだ。食べて歌つた。そして、お定まりの喧嘩があつた。ジョージという船員がマックという船員に殴り倒された。

へくたばれこの野郎」

とマックがジョージに言った。

へあ、おれはくたばるさ、くたばって見せてやらあ、しかし、てめえだつて、そのうちくたばる。それも、ただのくたばり方じゃあないぞ、飢え死にだ」

ジョージは倉庫掛りをやっていた。このジョージの一言で、大騒動になった。正気になったジョージが言うには、食糧庫には一冬越すだけの食糧がないというのである。

クリスマスパーティーどころではなかった。総動員して、倉庫の中の食糧を点検してみると、あと二カ月分の食糧しかなかった。六月まで待てば氷が溶けて船が来る。ところが食糧のほうは二月にはなくなるということになる。

ハーレイ船長は消えた食糧の行方を調査した。ペアー号は監視船の任務のかたわら、北極海沿岸に定住する人たちに對する補給船をも兼ねていた。

その夏ペアー号は北極海沿岸の数カ所に停船し食糧や物資をおろした。ポイントバローのように捕鯨船の基地として発達し、同時に白人毛皮商人の定着地となつたところでは、彼等の一年分の食糧や必需品を補給した。ポイントバローには捕鯨船の会社が経営している交易所と個人交易所が一カ所ずつあった。

調査の結果ポイントバローで荷揚げされた荷物について

疑いがかかった。

ポイントバローにおいて荷揚中、事務長は軽い眩暈を起した。二日目の荷揚中のことである。事務長は肥満体で、血圧が高く、それまでも、時々頭痛や眩暈を訴えることがあった。パーサーは、それまで助手として使っていたフランク安田に、あとを任せて自室に戻った。

それまでには段取りはすべて終っていた。あとはビル・ワレス宛に依託された荷物をおろし、ワレスから受取り書を買えばよいことになっていた。

ビル・ワレス宛に依託された荷物は主として食糧であつた。荷揚げは引き続いて行われる筈だったが、急に天候が悪化し吹雪になつた。ポイントバローでは夏でも吹雪になることは珍しくはなかつた。

作業は三時間ほど中止され、天氣の恢復を待った。夜のない季節だつた。晴れると太陽が出た。そしてそれは一日中沈むことなく、低い空を廻り続けていた。

荷役作業は再開された。

フランク安田は事務長に言われたように、ペアー号からボートに移され、さらに流水の上におろされた荷物が、再びエスキモーたちが漕ぐ皮張舟に積みかえられて、陸揚げされるのを待つて個数を数え、ビル・ワレスに引き渡し、その受取り書を取った。

ハーレイ船長は事務長に訊いた。

「君が荷役監視の眼を離れたときに、なんらかの不正が行われたとは考えられないかね」

「不正が行われたとすれば、多分それは、吹雪となった三時間の間のできごとではないでしょうか」

事務長は腕を組んだ。

三時間の吹雪の最中に、ペアー号の船艙から、食糧の梱包が運び出されて、ペアー号とポイントパローとの中間に、浮島のように動かない、流水のブロックの中に隠し込まれたと仮定すればどうであろうか。

「もしそのような悪事が行われたとすれば、多分、その日荷役に当った五人の水夫とビル・ワールスとがぐるになつてやったことだろう」

と言った。

「そのとき、フランク安田はどうしていたのだ」

ハーレイ船長はまさかフランク安田がこの悪事に加担していたとは思わなかったが一応訊いてみた。

「フランクは、私の代理として荷物の数をたしかめ、ワールスに引き渡す仕事をやっていた。彼には荷揚げを監視する義務もないし、たとえ、その権限があつても、吹雪の中で行われた悪事を発見することはできなかったでしょう」

事務長は、そこで、すべての責任は自分にあると言った。

「あの五人に監視の眼をおこたつたことが手落ちだった」と事務長は残念がつた。ジョージ等五人はかねてから、とかくの噂がある水夫だった。

吹雪の中でペアー号から氷山に運ばれて隠匿された食糧の梱包は、ペアー号が去つてからワールスの手によつて悠々と陸揚げされたのではないかと想像された。

「だが、その五人を取つちめるべき証拠はなにもない」と船長は言つた。事務長も同感だった。吹雪の中の悪事は飽くまでも想像であつた。

船長と事務長は、その日の荷役にたずさわつた五人の白人水夫と、事務長の補佐を務めたフランク安田を一人ずつ呼んで訊いた。

五人の水夫は吹雪の間の三時間は、船艙で休憩してたと答え、フランク安田は、ビル・ワールスの事務所吹雪をさけていたと答えた。

「三時間ぶつづけに吹雪いていたのではあるまい、吹雪は時々息をついた筈だ。そのときお前はなにをしていたか」

船長はフランクの眼から視線を離さなかつた。

「時々外に出て見ました」

「なにか見たらう、見た筈だ」

フランクはなにか言おうとした。しかしついに彼は一言

も発しなかった。彼は吹雪の合間にうごめく人影を流水の上に見ていたのである。なにをしているのかは分らなかったが、吹雪の最中に、誰かが流水の上にいることだけは見届けていた。

「見たらう。流水の上に人がいるのを見たろう。流水の間に食糧の入った梱包を隠しているのを見たであらう」

事務長が言った。

「はいえ、なにも見えませんでした。たとえ吹雪が息をついたとしても、氷霧で遠くは見えませんでした」

フランクは、彼がいまいかなる立場にいるかを充分知っていた。流水の上に人の影を見たと言えば、五人の船員は疑われることになる。それだけで、五人が食糧をごまかしたとは断定はできないが、その証言で、五人の船員が苦境に立つことは明らかである。フランクは沈黙した。

ハーレイ船長は、調査した結果、食糧は手続き上の手違いで初め頃から積んでいなかったと発表した。それでことが落着くとは考えられなかったが、この際、こんなことをいう以外に方法はなかった。

「手続き上の手違いだというならば、その手続き上のミスをおかした上級幹部は、不足分の食糧の補給を求めに、ポイントバローへ行くべきである。二カ月分の食糧を六カ月分として食い延ばすということは、一日三食だったのを一

食にすることだ。そんなことは絶対にできない」

と船員は騒ぎ出した。

「食糧を盗んでこっそり売った奴がいる。そいつ等をポイントバローにやるべきである」

という者もあった。ベアー号内部では、ジョージ等五人の水夫が食糧をごまかしたのだとひそかに囁かれていた。

フランク安田は水夫たちにつかまって訊かれた。お前はなにか知っている筈だ。ジョージ等五人が吹雪の中で食糧を盗んで流水の中に隠したのを知っている筈だ。それを言えとせまられた。

フランクが秘密を握っているらしいという噂が流れると、ジョージ等五人の水夫たちは身にふりかかった危険から逃れるために、フランクの口を封じようとした。

一等運転手が、ジョージ等に拉致されようとしているフランクを助けたのは、この問題が起きて数日後であった。一等運転手はこれを船長に報告した。

船長はフランクを船長の傍に置くことにした。他のオフィサーたちにも、フランクから眼を離さないように言った。だが、船長やオフィサーたちがいかにフランクの味方についたとしても、決して彼の身が安全だとは言えなかった。フランクが事務長の眼をごまかして伝票を書きかえたらしい。フランクは食糧を盗んで売り払った一味である」

というような噂が流れ出すと、フランクに対する船員の眼はきびしくなった。フランクが日本人であるにもかかわらず、キャンビンボーイとしてペアー号に乗り込んでから僅か三年の間に、船長や事務長等の信頼を得て、事務長の助手を兼ねたり、最近では氣象観測の仕事までするようになった。従来氣象観測は二等運転手の仕事であつた。

相手が有色人種であるということだけで、その人のすべてを否定しようとする偏見が、当時のアメリカ人の中に根強くはびこつていた。その感情は伏流となつて人々の心の底を流れ、なにかのきっかけで爆発的に噴出した。有色人種が單なる風評だけでリンチにかけられて殺されたという例は珍しくはなかつた。

へなに、あのジャップがおれたちの食糧を盗んだ一味だったのか、それならば、まずフランクに責任を取らせようではないか、あの野郎にポイントバローまで行つて、食糧を持って来て貰おうではないか

船員等は船長の命令によつて、一日の食糧がそれまでの三分の一に減らされた鬱憤をまずフランクにぶつつけた。

暗くて、外は寒かつた。娯樂施設もない。酒もないし女もない。その上食糧を減らされた彼等は、やり切れない怒りをどこかにぶつけないければおさまらなかつた。フランクは当面の対象として格好な存在だった。まずフランク

が血祭りに上げられ、その次にはジョージ等五人が狙われ、更には上級船員たちの身边にも、わざわざ及ぶことが考えられた。

フランクは、薄いスूपを舐めるように飲んでゐる一人の船員が、ふと彼に向けた憎惡の眼を見たとき、もはやこれ以上此処に止まることは危険だと思つた。暗いランプの光に照らし出されたその船員の顔は、子供のころ寺で見た地獄園の中の赤鬼の顔とそっくりだった。赤鬼は一人ではなかつた。そこらじゅうにいっぱいいる赤鬼の中の一人が、ジャップを殺せと一声叫べば、それでおしまひになるだろうと思つた。船長の力をもつてしても集團の暴力にはかなわない。おそらくフランクは、手足を縛られ、船の外へ抛り出されるであらう。寒氣は彼を取りかこみ、三十分経てば全身の知覚を失い、一時間後にはかちかちに凍つた人間の形がそこに残るだらう。もし彼等が更に残酷なリンチを意図するならば、フランクは防寒具を着せられて、船外に抛り出されるだらう。死への苦しみは暗闇の中で数十時間先に持ち越されるに違ひない。

へフランク、氣をつけろ、狙われているぞ

彼に氣象観測を教えた二等運転手が言つた。

へリンチですか

困つたことだが、あいつ等の頭は狂つてゐる……

二等運転手は気の毒そうに言った。

へどうしたらよいと思いますか」

「先手を打つよりしようがないな」

先手を打つと言われたときフランクの心は決った。彼は船長のところへ行つて、ポイントバローへ救援を求めに行きたい旨を申し出た。

へばかなことを言え、そんなことができるものか、ポイントバローへ行けということは地獄へ歩いて行けということと同じだ」

へでも、ここにいっても間も無く私は地獄へ追いやられるでしょう。私は自分を試してみたいのです。船長、言ってみて下さい。ポイントバローへは絶対に行けないでしょうか」

へいや、可能性はある。運がよければ行きつくことができるだろう。しかし、その確率はきわめてとぼしい」

船長はその時苦痛を飲みこんだような顔をした。強いてフランクを引き止めても、再び、この氷原に太陽が現われるまでフランクの安全を保証できる自信がないようだった。ハーレイ船長はフランクの決心を船員のすべてに告げた。フランクはベアー号の食糧危機を救うためにポイントバローに救援を求めに行きたいと申し出た。フランクと共にポイントバローへ行く者を募集する」

だが、フランクと共に暗闇の氷原へ飛び出そうという者は一人もなかった。

フランクがベアー号を後に青い夜明けに向つて出発したとき、ベアー号の全員が外に出て彼を見送った。まるで葬列を見送る人のように静かだった。フランクを元気づけたら、彼の前途の安全を祈るような言葉を投げかける者はごく少数だった。多くの者は、ベアー号に乗っていたたった一人の日本人が今、ベアー号を去って行くのだという顔で見送っていた。

へどうせ、氷原の上でのたれ死にする奴に食糧を背負わせてやるなんてもったいねえじゃあないか」

フランクが背負っている食糧の入った袋を指して大きな声で言う者さえいた。

2

フランク安田は歩き続けた。時々彼はポケットからベーコン（豚肉の燻製）の肉片を出して嚙んだ。その後に激しい渇きが彼を襲った。足下の雪をすくって口に入れたかった。そうすれば一時的には渇きから逃れることができるが、すぐ前に倍する渇きが襲って来ることをよく知っている彼は、雪を口にするようなことはしなかった。雪が渇きを誘い、その誘惑に負けて、雪を口にすることは、その雪をとかし